
魔法少女まどか マギカ 歴史を見届けるもの

黒忍者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女まどか マギカ 歴史を見届けるもの

【Nコード】

N6777Y

【作者名】

黒忍者

【あらすじ】

光の国の戦士が地球を守ってからいくらかの時間が過ぎたとき、歴史を見届ける戦士がやってくる。

EP 1 違う地球（前書き）

この作品を開いていただきありがとうございます。

最初に、この作品の主人公は必ずしも正しいとは限りません。

まどか達の味方とも限りませんし、恋愛要素を入れる予定もありません。

何より作者の文章力から見苦しい箇所が多々あると思いますがそんな作品で良いという方はどうぞ御付き合ってください。

EP 1 違う地球

多くの生命が住む星“地球”。そこからはるか遠く太陽系も銀河系もこえた宇宙にある惑星の一つ“歴史の国”。

そこで二人の男が話し合っていた。

「地球……ですか？」

自分の上司から話を聞いたとき男は思わず聞き返した。

「うむ、君もその星の名前は知っているだろうし噂くらい聞いたことがあるだろう」

「有名ですからね」

男自身も噂などはよく聞いていた。宇宙に浮かぶ宝石のように美しい星だと。

「その星に行ってもらいたい」

「なぜ？そこは昔から光の国の戦士が守ってきた星では？」

自分たちの国からそう遠くないもう一つの国“光の国”。M78星と呼称されている星の戦士達は昔からこの地球という惑星を守ってきた一族だ。もちろん彼らが守るのは地球だけではないがそれでも優秀な光の国の戦士は地球を訪れている確率が高い。宇宙警備隊の隊長や教官も訪れたことがあるらしい。だからこそ男は疑問を持った。彼らに任せておけばよいのでは？ という疑問である。しかしその疑問を分かっていたかのように男の上司が説明する。

「うむ……しかし、光の国の戦士が守るのは光や希望といったものだ。それに対して我々は――」

「歴史を見届ける戦士、ですな」

「その通り、正しい歴史を見守るのが我々の使命だ。しかし最近になってその星の周囲に歴史の矛盾点がいくつも見つかった」

「それで私が？」

この段階でようやく男は理解した。要するに自分たちの力が必要とされているのである。ならばその要望に答えるのが彼ら歴史の国の戦士である。

「うむ、行ってくれるかね」

「もちろん、それが私達は歴史の国の戦士の使命ですから」

男は即答しその場から消えた。

「“地球”か。たしか“ニンゲン”って言ったかな。知的生命体の名前は」

男は広大な宇宙空間を太陽系へと移動しながら呟いていた。彼らの種族、つまり歴史の国の戦士は光の国の戦士と違い、変身能力を持っていない。しかし肉体は光の国の戦士と同じように頑丈であり宇宙空間でも活動が可能である。

「しかし今になって歴史の歪みか……何かが干渉している可能性が高いな……」

男が聞いている話では最後に地球を守ったのはメビウス（地球ではウルトラマンとよばれているらしい）という光の国の戦士らしい、それから結構な時間が経っている。それなのに今になって歴史の歪みが出てくるのはどうも不自然である。場合によっては異星人との戦闘になるかもしれない。そんなことを考えながらも太陽系にたどり着いた男は目的の星を見つける。大きな太陽の光を受け青く光る星。

「あれが地球か……確かに美しな、光の国や歴史の国とは違った輝きを持っている。生命の輝き……光の国の戦士が守ろうとするのも無理はない。多くの侵略者が奪おうとするのもな」

初めて見る星にしばし見とれていた男だったがふいに違和感を覚える。

「歴史の歪みか……わずかだが確かに感じるな」

永い間宇宙の歴史を見守り続けてきた一族だからこそ感じる事ができる歴史の歪み。自らが使命を負った原因。何はともあれ自分のやるべきことは決まってる。そう自分に言い聞かせ男は地球に降りようとする。

「つなに!？」

唐突に大気圏に入ろうとしていた男の体が引つ張られる。困惑しながらも目を向けた先には宇宙が醸し出す黒ではない、宇宙を旅するものにとっては出会いたくない存在、光さえ抗うことのできない闇の竜巻があった。

「ブラックホールだと?! 馬鹿なっ、なんで今まで気付かなかった!」

男は予想もしていなかった。そもそもこんなところにブラックホールがあったらことは自分だけではすまない、この太陽系自体もただではすまないだろう。しかし現実にはそこには男を吸い込もうとしている巨大な闇がある。

「ぐ、振り切れない?! こいつ俺だけを吸い込もうとしているのかっ」

もはや一切の余裕はなかったが、よく周りを見てみると闇に吸い寄せられているのは自分だけであり周りの星にはなんの異常もない。この時点で既に男を吸い込もうとしている闇がブラックホールかどうか怪しいものだがそれでも異常なものには変わらない。

「くそっ仕方がない! 歴史の国の戦士達よ、俺のヒストリーシグナルを受け取ってくれ!」

そう言って男は宇宙空間に故郷の仲間らに異常事態を知らせるためのシグナルを出し、闇に飲み込まれた。

「うぐぐ……くそ、俺は生きてるのか？」

それからどのくらいの時間が経ったかは不明だが意識を取り戻した男はズキリと痛む体を抱えながら自分の状態を確認する。あんな不可解なモノに巻き込まれながら五体満足で頭部にもなんの障害もないのはもはや奇跡といってもいいだろう。そこにふと気配を感じ少し周りを見回してみると、

「あ、あの大丈夫ですか？」

「ん？」

心配そうにこちらをのぞき込む三人の少女の顔があった。ぱっと見た限り、地球の人間と非常に似た姿をしていた。

「君たちは……何者だ？」

「ちよつと心配してんのに何よそれ、あんたこそ誰よ」

気の強そうな少女がムツとした顔で問い返してくる。『しまった』と男は思った。今の発言では敵意を持っているとまでは言わずとも相手に警戒心を持たせてしまわざるをえない。

「さ、さやかさん。この方は倒れていらしたのですからもう少し……」

「あ、いやいいんだ。すまない私の方が悪かった」

「べ、別にそんなに怒ってないけど……」

友好的な種族でよかった。男はそう思い改めて辺りを見回した。透明感のある建物によく整えられた道路や住宅街。文明はなかなか進んでいる星のようである。

「ああ、その……ひとつ聞いていいかい？」

「なにかな？」

「ここはなんてところだい？」

「ここ？ 見滝原だけど？」

「ミタキハラ……聞いたことない星だな」

お互いに“？”をかかけていると最初に自分に話しかけてきた少女がもう一度話しかけてきた。

「あの……星って？」

「ん？ いやミタキハラなんて星聞いたこともなか」

男の本日二度目の『しまった』であつた。

「（文明が進んでいるからって宇宙に進出しているとは限らない……ああ、やつちまつた。今の反応から見ると科学はまだそこまでいってないみたいだな、明らかに変なものとして見られているぞ）」

ブラックホールに飲み込まれながらも無事だったからついホツとしていたのかもしれないがそれでも今の発言は慎むべきだった。そう思っているとさやかがさらに質問してくる。

「ねえあんたどこの国の人なの？」

「俺は歴……遠い国から来た。旅をしてるんだ」

「え、じゃあ日本人じゃないの？ 私てつきり日本人だと思つてたよ」

「ニホン……ここはニホンっていうのかい？」

「ええ？ 知らなかったんかい。日本知らないってすごい田舎からきたんだあんた」

「ちょ、ちょっと待ってくれ」

「「「……？」」」

三人の少女に『何言ってるの？』という視線を向けられ男は困惑する。

「ここはミタキハラじゃないのか」

「そうですね、ここは見滝原市ですよ」

「しかし君たちは今ニホンって」

「うん、だから日本の中にある見滝原市ですよ」

男は混乱していた。自分と少女たちの会話がかみ合っていない。それは向こうも感じているようで訝しげに男を見ていた。

「あのよかつたら……交番を教えましょうか？」

「まどかー、もうさすがにそんなことしたら遅刻しちゃうよ」

「でもこのまま放つとけないよ、なんだか困ってるみたいだし……」

「かつーやっぱりまどかは優しいなー！ 私の嫁は地球上でただ一人まどか！ あんただけだよ！」

「ちょ、さやかちゃん人が困っているのに……あれ？」

まどかたちがふと男を見ていると男はまるで狐にでも化かされたかのようにぽかんとしていた。

「あ、あのー」

「ここは地球なのか？」

「え？ なに？」

「あ、いや、なんでもない。俺のことは大丈夫だから行ってくれていいよ。ありがとう」

少女たちは腑に落ちないというふうな表情をしていたが男は大丈夫だからと少女たちと別れた。そしてそのあと男はぽつりと呟いた。

「どういうことだ……ここはいつたい……地球なのか？ だって彼女たちは人間？」

EP1 違う地球（後書き）

はい、という訳で最初からはあ？って感じでしたね。

投稿速度は週一を目指しております。

また感想はいただいてもすぐには返信できない場合があります。
それでは第一話を読んでくれてありがとうございます。

EP2 少女たちとの出会い（前書き）

前回に引き続きまずい文章力です

EP2 少女たちとの出会い

少女たちと別れたあと男は一人で悩んでいた。

「俺は確かにあの時ブラックホールのようなものに飲み込まれたはず」

そのあとの記憶は定かではないが無意識の中でブラックホールから抜け出せたとは考えにくい。

ということはここは自分が元いた宇宙とは違うはずである。しかし、まどかたちとの会話からこの星が地球であると知らされた。

「だがもし……」

今男の身に起きている不可解な現象を可能性を高い順で考えたときあるひとつの答えが思い浮かんだ。それは噂程度には聞いていたことがある。かつて光の国の戦士も体験したことがあるという、別の宇宙に干渉すること。

「並行世界ってやつか？ 勘弁してくれよ……」

頼みの綱はこちらの世界に来る前に放ったヒストリーシグナルであるがそれに仲間が気づき迎えを超越してくれるまでいったいどのくらいの時間がかかるかわからない。

「こつちには仕事があるっていうのに……って言いたいところだが……」

男はふと目を細め辺を見回す。

「歴史の歪みがある。それもかすかにじゃない、中粒がちらほらとある」

だが、と男は考える。男の感じた歴史の歪みは今まで見てきたどんな歴史の歪みよりも異質で歪だった。

異星人や怪人によって作られたものではなくいくつもの歴史が重なり合っているような感覚だった。

「なにがあつた？ この宇宙で……ともかく俺は歴史の国の戦士だからな。予定にはなかったがこの星の歴史を見届けなければ。しばらくはこの宇宙に留まるか」

あとに小さく「これだけの歪み……本意ではないが修正も必要かもしれないな」と呟いた。

その後男が最初に訪れたのは街の図書館であった。

「ライブラリ……とにかくこの世界に対する情報が少なすぎるかな」

物事の基本は情報だ、と意気込みながら図書館に入る男。一般図書が置いてあるコーナーには目もくれず新聞などが置かれているコーナーへと向かう。

しかしいざ新聞や歴史書が置かれているエリアに入ろうとすると職員らしき人に呼び止められる。

「あの、こちらのエリアの書物閲覧には許可が要りまして」

「許可？」

「はい、なかにはかなり希少な物もあるのでそのような体制をとらせていただいてます。何か身分証はお持ちですか？」

「……身分証？」

「はい、免許証などで構いません」

「あー、申し訳ない今日は忘れてしまって」

「そうですか……それでしたらこちらにお名前と電話番号を」

「あつ、いや結構です。また明日改めて来ます」

長居して怪しまれる前に図書館を退散したあと、男はいよいよ自分
分が手詰まりになりかけている事を感じた。

「まいったな。そういえば今の俺には何もないんだった」

男は戦士であるから食事や宿などはどうにでもなる、食事はほとんど
摂らないので気にする必要はないし寢床も野宿すればいい。しか
しここでの情報収集などは一人では限界がある。一応歴史の国の
戦士としてサーチリングという物質や生物の歴史を検索する能力は
持っている。

そのためとりあえずここが地球であるということはサーチリング
でわかった。しかし本当に歴史の歪みを修正しようとするとならに
多くの情報が必要とする。

「しゃあないな、面倒だがまずはそこらへんから用意していくか」

グツと拳に力を入れる男だった。

しかし数時間後

「これはないわ……」

公園のベンチでうなだれる男の姿があった。理由は簡単、数時間前と何も状況が変わっていないからである。

意気揚々と身分証を作りに行ったがまず住所がない。住所がないから職もあるわけない。さらに名前もないしお金もない。はっきり言って役所の職員には職質されても仕方ないほど怪しげな男に見えただろう。

「まさかこんな序盤で行き詰まるとは……いやそもそもこの国、いや星……どっちだっけ？ まあとにかくこの地球の決まり事が悪い。俺は悪くないだろ。多分……」

もともと男はこの星に先に訪れている仲間の戦士と合流し共に調査をする予定だったのだ。地球上で使う名前や役割なども男が本来行くはずだった地球で知らされるはずだった。しかし結果は言わずもがなである。

「どうすつかなー……ん？ あれは今朝の……」

ふと男が顔を上げると今朝自分と会話した三人の少女の一人が裏路地に入っていくのが見えた。

「ずいぶんと目立つ髪だな。あの子も戦士なのか？ って言うてる場合じゃない」

そこに男が感じたのは歪みだった。歴史の歪みとはまた別の異色な歪み。今まで感じたことはないがこの星の歴史に大して何らかの影響を及ぼしているだろうと思われる歪みだった。

「おい！」

「え！？ あ……あなたは今朝の……」

「……誰？ 何者かは知らないけど早くここから立ち去りなさい」

男が少女のあとを付けるとそこには怯えるように座り込む今朝の少女一人だけではなくもう一人、紫を基調とした服と盾のようなも

の装備した少女がいた。それだけでも十分驚きではあったが男はさらに驚くことになる。

「そいつは……」

「こ、この子がね……私に」

「君、名前は？」

「え？ わ、私鹿目まどかです」

「鹿目まどか、今すぐその生き物から離れる。それからそこを動くんじゃない」

「え？！ どうして？ この子怪我してるんだよっ」

「関係ない、今すぐ放すんだ。おっとおまえもそれ以上近づくな」

あえて冷酷に言い放つ男は紫の少女にも同様に言い放つ。紫の少女も多少の困惑を見せながら男に問いかける。

「……あなたは何者」

「ただの流れ者だ。鹿目まどか、はやく」

「い、嫌だよっ、こんなに苦しそうにしてるのに……助けてあげないと……」

「鹿目まどか、今から言うことをよく聞くんた。君の安全のために言ってるんだ」

「えっ……」

「大丈夫だそんなひどいことをしようとは思っていない、だから今すぐその生き物を離すん」

直後、男の視界に白い煙が覆いかぶさる。

「まどか、こっち！」

「さやかちゃん?!」

同じように今朝会った青色の髪の毛の、さやかと呼ばれた少女がその手に消化器を持ちながら自分たちに向けて放っていた。

「おい待つん」

「あなたは誰？」

追いかけようとする後ろから紫の少女が問いかけてくる。男はいったん止まり、逆に少女に問い返す。

「その質問なら、俺だってお前にしたいがな。すまないがそれは後回しだ」

「……」

踵を返して走り去る男を少女は見ながら呟いた。

「あれは……いったい」

「なんなのよあのコスプレ転校生！　っていつかまどかなにその生物？！」

「わ、わかんない！　でもこの子が助けてって！」

「はあ？！　しかも今朝の意味不明男までいたし」

「誰が意味不明男だ」

「ぎゃあああああ！　出たああああ！」

必死に走って来たにもかかわらず男はまどかとさやかの目の前にいた。

まどかがおそろおそろ男に話しかける。

「あ、あの！ あなたは」

「悪いが名前はない、それよりもその生き物を渡してもらおうか」

「そ、そんな言い方は敵キャラの死亡フラグよ！　なんかあんた敵キャラっぽいし！」

「あ、あのこの子怪我してるんです。だから手当してあげないと」

「手当は俺がする、だからそいつを渡して」

無理やりにも奪おうとする男が異変を感じて急に立ち止まった。まどか達もつられて後退りをやめる。

「な、なんなのよこれ?!」

さやかの叫びが響いている、自分たちのいる場所が明らかに先程までとは違うものに変貌していたからだ。

まるで狂人の精神を具現化したような歪な世界。自然界ではありえないような風景。

さらに男の嫌悪感を煽ったのは、その歪な配色であった。宇宙の包み込むような優しい闇ではなく。負のエネルギーを絞って作った

絵の具のような色だった。

「おい」

「な、なに……もしかしてこれもあんあがやったの?! あんたいったい」

「これは違う、俺じゃない。いいかお前たち、俺のそばから離れるな」

「はあ!? あんたさっきまで私たちのこと追っかけ回しておいてそんなこと」

「俺が追つてたのはその変な生き物だ。いいから黙って俺の後ろにいろ。いいな」

素早く当たりを見回すとなにやら小さい物が蠢いている。

それをどう形容すれば良いかよくわからなかったが外見だけで言えば蝶の羽に毛玉がカイゼル髭を生やしたような歪なものだった。

どうみても自分たちに敵意を持っているように見えるそれを見ながら男はとりあえずこの場を乗り切らなければならないと考える。

「（むやみに力を使いたくはないが仕方がないつ、ヒストリウム光線を）」

男が腕を交差させ何かをしようとした瞬間、巻き起こる金色の爆

風と光が毛玉を吹き飛ばした。

「あなた達、危なかったわね」

奥から歩いてくるのはまどか達と同じ制服を着た金髪縦ロールの少女だった。

まどかとさやかは何が起こったのかはわからず、惚けていたが、男は少女が持っている宝石のようなものを見ると訝しげに顔をしかめていた。

それは三人がお互いに自己紹介をしている間も変わらなかった。自己紹介が終わり金髪の少女、巴マミというらしい。彼女は男に向き直りまどかたちに向けていたものとは違う表情で問いかける。どうやらさやかか男が謎の生き物、こちらはキュウベえというらしいが、それを男が奪おうとしたことを話したらしい。

「それで、あなたは？」

「自己紹介したいが残念なことに名乗る名前がないんでな」

「そう、ならいいわ私もあまりあなたとは仲良く出来そうにないもの」

「そりゃ残念」

でも、とマミは振り返りながら言う。

「気に入らないから助けないっていうのは魔法少女として失格だから、今回は助けてあげるわ」

そう言っ て宝石を自ら放り投げキャッチする。

宝石から目もくらむような光がほとばしりマミの体を覆う。

黄色を基調とした服にスカートと帽子。

男が知っている光の国の戦士が変身するのと似ていると言えなくもないが、多少派手すぎるだろう。

しかしそれは置いておいて、変身してからはマミの一方的な戦いだった。

一瞬にして空中に無数のマスケット銃を出現させると一斉射撃。

あまりの轟音にまどかとさやかは耳を塞いでいた。

それは

「（人間が使えるエネルギー量じゃない）」

そう男に思わせるほどのものだった。

やがて煙が晴れるとそこには先程までいた化け物は消滅しており空間も通常のものへと戻っていく。

「さて、もう大丈夫だから行ってもいいのよ？」

「……少し用があるんだがな」

男はちらりとまどかが抱えている生き物を見る。それに気づいた

マミはより一層語調を強める。

「今日は運が悪かったのよ。今日のことは夢だと思って忘れなさい。それと、その子は見世物じゃないから」

「分かったよ」

男はやれやれと首を振るとその場を去っていった。

それから30分後

さきほど男が出てきた場所からもう一人の少女が出てくる。まだか達と対峙していた紫の少女だ。少女は何か思いつめるような表情をしていたがふと何かの気配に気づく。

「あなたは……」

「よう、その様子じゃあの金髪の子に同じ対応されたんだな」

紫の少女が見つけたのは壁に寄り添っている男だった。敵意は感じられないがそれでも警戒を緩めずにいると、男が口を開いた。

「少し……話さないか？」

EP 2 少女たちとの出会い（後書き）

あまり最初から信頼させれるのはなあ……と思って書いたらこんなになりました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6777y/>

魔法少女まどか マギカ 歴史を見届けるもの

2011年11月27日22時59分発行